

終末期がん患者の倦怠感に対する熟練看護師の緩和ケアの経験

樺澤三奈子^{*1)}、前澤美代子²⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学看護学部、²⁾山梨県立大学看護学部

【背景と目的】がんに関連する倦怠感（Cancer-related Fatigue）は、がんとうがん治療に伴い生じる身体的、情緒的、認知的エネルギーの消耗の主観的感覚である。終末期がん患者が体験する倦怠感、身体的・心理社会的な要因が絡み合い、増悪し、難治性である。がん患者の多くは、倦怠感の“身の置きどころがない”苦痛のために、残されたひとときを穏やかに自分らしく過ごすことができず、この苦痛からの解放を切に願っている。本研究の目的は、終末期がん患者の倦怠感に対する熟練看護師の緩和ケア経験を明らかにし、終末期がん患者の倦怠感に対する看護について示唆を得ることである。

【方法】対象は、関東地方にある一地域がん診療連携拠点病院の緩和ケア病棟で5年以上の勤務経験がある看護師で、終末期がん患者に対し日常的に看護実践を行っており、研究参加への同意が得られた者とした。データは、終末期がん患者の倦怠感の看護実践の経験、すなわち看護師の倦怠感に関する認知、判断、態度、行動、評価といった看護実践過程の振り返りを促すインタビューガイドを作成し、これを用いた半構造化面接法により収集した。インタビューガイドには、性別、看護師経験年数、当該病棟経験年数、認定資格の有無等の属性を尋ねる質問を含めた。面接は、2016年2～3月にかけて、調査施設内のプライバシーが保たれる場所で1人あたり30～60分程度で実施した。面接内容は、対象者の許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録とした後、質的帰納的方法により分析した。本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て実施した（認証番号15037）。

【結果】対象者は女性8名で、看護師経験平均年数は15.4年（8～21年）、緩和ケア病棟経験平均年数は8.3年（5～15年）であり、そのうち3名が緩和ケア認定看護師の資格を有していた。分析の結果、終末期がん患者の倦怠感に対する熟練看護師の看護実践の経験は、346のコードから61のサブカテゴリー、25のカテゴリー、9の【コアカテゴリー】へと集約された。熟練看護師は、倦怠感のある終末期がんとの関わりにおいて、【統合体としての人間観】と【経験から培われた倦怠感看護への構え】をもち、患者の存在丸ごとを“看”て【エネルギーのゆらぎの察知】、【倦怠感の包括的な理解】、【要因の予測的探索】を行い、【患者・家族・スタッフとのケア方法の模索】を続けながら、“エネルギーが乏しくてちょっとしたことでエネルギーが変化する患者にとって馴染める空気になれるように”と【患者のエネルギーのゆらぎとの一体化】を意図的に図り、【倦怠感の知覚の緩和】に専心しながら、【患者・家族・スタッフとのケア効果の分かち合い】に努めていた。

【考察】結果より、終末期がん患者の倦怠感に対する熟練看護師の緩和ケアの経験は、倦怠感に特有なエネルギーのゆらぎの直観的な察知と倦怠感の包括的なアセスメント、チーム間での最善のケア方法の選択、実施、評価という臨床判断に基づく看護実践の過程であるといえる。またその実践過程を導く土台は、人が統合体であるという確固たる人間観と、過去の失敗あるいは成功体験を丁寧に振り返り育んできた倦怠感の看護に対する価値観・姿勢であることが窺えた。これらの考察より、終末期がん患者の倦怠感を緩和するための看護の充実に向け、がん患者の倦怠感の体験および看護実践の共有と振り返り、倦怠感に関する臨床判断力を高める学習支援の必要性が示唆された。

本研究結果は2017年2月の日本がん看護学会学術集会で公表予定である。